

■ 研究推進委員会 活動計画書

提出日：2020年11月27日

名 称	日本庭園の「こころ」と「わざ」に関する研究推進委員会
委員長	氏名（所属）：栗野 隆（東京農業大学） 連絡先 e-mail アドレス：t3awano@nodai.ac.jp
幹 事	氏名（所属）：張 平星（東京農業大学） 連絡先 e-mail アドレス：hc207185@nodai.ac.jp
その他 構成員	氏名（所属）： 宍倉孝行（日本植木協会） 近藤盛大郎（日本植木協会） 寺石隆一（日本造園組合連合会） 井上花子（日本造園組合連合会） 山田拓広（日本造園建設業協会） 藤吉信之（日本造園建設業協会） 高橋康夫（日本庭園協会） 小沼康子（日本庭園協会） 小島裕史（京都府造園協同組合） 井上勝裕（京都府造園協同組合） 加藤友規（京都芸術大学・植彌加藤造園） 吉村龍二（環境事業計画研究所） 井原 縁（奈良県立大学） 上田裕文（北海道大学） 大野暁彦（名古屋市立大学） 福井 亘（京都府立大学） 水内佑輔（東京大学演習林） エバレット・ブラウン（国際フォトジャーナリスト・日本文化研究家） 大江 忍（伝統を未来につなげる会） 川井徳子氏（ノブレスグループ）
目 的	<p>「日本庭園」は自然の一部を生活に取り込んだ住まいの空間として、信仰と結びついた神秘の空間として、もてなしの心を織り込んだ愉悦の空間として、時の当主の思いと庭匠の技術によって多様な日本庭園が創造され、日本人の歴史とともに歩んできた。</p> <p>ただし、近年の造園分野では、日本庭園の調査研究はさほど大きな盛り上がりを見せていないのも実情である。そこで2020年度5月の日本造園学会全国大会において、「日本庭園の文化と技術—未来へ継承すべき日本庭園の空間文化と伝統技術の価値を考える」と題したミニフォーラムを企画開催し、こんにちの多様性時代であるからこそ日本庭園の普遍的な価値を体系的に把握することが必要であることを確認しつつ、日本庭園の「こころ」（哲学や思想）と「わざ」（日本庭園を形作る技術）に関する研究推進委員会を日本造園学会に設けることが妥当であることを結論とした。</p> <p>以上を踏まえ、本研究推進委員会は、日本庭園の価値の普遍性を立証するため、歴史文化・芸術的アプローチ、技術・技能的アプローチ、経済・観光的アプローチといった多面的観点で日本庭園の特質を明らかにすることを目的として活動を推進し、世界的視野に立ちその価値を普及・啓発し、積極的な情報発信をおこなう。</p> <p>本研究推進委員会の活動にあたっては、造園・文化遺産の学識者・専門家・行政の方々のアドバイスを適宜得ながらすすめてゆくこととしたい。</p> <p>本研究推進委員会では日本の伝統的な造園技術を多分に含んでいると推測される神社林（例：明治神宮の杜）の創出・維持・育成・継承に関する諸点についても検討をおこなう。</p> <p>あわせて、本研究課題の目的達成においては、日本造園組合連合会、日本庭園協会、京都府造園協同組合、日本植木協会の関係団体のご協力を得ながら調査研究をすすめてゆくものとする。</p>
活動計画 及び 想定される 成果 (1年目)	日本庭園を形作る「こころ」と「わざ」を保有する人々は、日本造園組合連合会、日本造園建設業協会、日本庭園協会、日本植木協会、文化財庭園保存技術者協議会、海外では北米日本庭園協会にも存在している可能性がある。また、日本庭園を形作る「こころ」と「わざ」に知見を有する人々は、民間造園企業のみならず大学や行政などにも存在する。日本造園学会は、産官学の様々な立

	<p>場の人間が、一造園人というフラットな関係で活動できる組織であり、学会をプラットフォームとして、日本庭園の哲学と技術をトータルに把握する妥当性が確認できる。</p> <p>活動1年目は、年4回程度のディスカッション(遠隔会議を含む)と1回以上のシンポジウム(日本造園学会全国大会ミニフォーラム等)、庭園・神社林の創出・維持・育成・継承に関する技術の現地検討会・技能を有する方を招いた座談会を3回程度おこない、以下の点を把握する。</p> <p>(1) 日本庭園の「ころ」(哲学、思想)の把握</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 日本人の美のとらえ方の把握 2) 日本人の自然のとらえ方の把握 3) 日本人の空間のとらえ方の把握 <p>(2) 日本庭園の「わざ」(技術、見えない知恵や工夫)の把握</p> <p>A) 土工・地形造成に関する技術:庭園を作庭する際に池を穿ち、築山を設けるための地形造成にともなう技術・道具・使用言語を把握する。</p> <p>B) 池泉・水工に関する技術:近代に存在していた滝の給水方法、池泉の護岸裏込めや池底の防水方法、排水方法に係る技術・材料・使用道具・使用言語を把握する。</p> <p>C) 石の運搬・据え付けに関する技術:敷地内に石を運び、石を吊り上げ、適当な位置に据える技術・使用道具・使用言語を把握する。</p> <p>D) 植木の繁殖・造形・植栽・整枝に関する技術:庭園の生きた構成要素である植木について、接木に代表される繁殖、樹形や葉の付き方を人為的に操作して「造形物」とも称される仕立て、移植を含む植栽、「透かし」に代表される整枝剪定に関する技術・道具・使用言語を把握する。</p> <p>E) 庭園施設の工作・組み上げに関する技術:庭門、垣根といった庭園施設の工作、石灯籠、石塔といった石造物の組み上げに関する技術・使用道具・使用言語を把握する。</p> <p>初年度の成果として、庭園の築造、育成、維持に関する造園技術の一覧表を作成するものである。</p>
(2年目)	<p>活動2年目は、年4回程度のディスカッション(遠隔会議を含む)と1回以上のシンポジウム(日本造園学会全国大会ミニフォーラム等)、庭園の技術に関する現地検討会・技能を有する方を招いた座談会を3回程度おこない、以下の点を把握する。</p> <p>(3) 日本庭園の「ころ」と「わざ」を有している人の把握</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 築造に関する技術を持っている人の把握(国内・国外) 2) 育成や維持に関する技術を持っている人の把握(国内・国外) 3) 保存に関する技術を持っている人の把握(国内・国外) <p>研究会の活動初年度に記載したA)～E)を整理しつつ、最終年度では、技術の一覧と各技術に対応した解説文、図面(見取り図を含む)、写真による報告書を作成する。さらに個々の技術の記録動画も添付資料として加え、研究成果品とする</p>